

知的障害は外見からはわかりづらい障害であるため、ややもすると誤解を受けることがあり、行動が消極的になる傾向がみられていることから、本会では「障害を理解するための体験活動」のプログラムを準備し学校や地域団体などを対象に体験会を開催し、障害者の困り感に対する理解を深める活動を進めている。

本会の構成団体として、障害者本人が中心となって活動する「本人部会」という組織がある。毎年、本人たちで計画を立て、多様な活動に取り組んでいる。参加者は、作業所や一般就労など一人で移動することができる会員ではあるが、移動については、普段はICカードを使用して、決まった場所への移動が中心で、券売機を使用しての乗車や、駅構内の移動、慣れない場所への移動など不安を感じる場面がみられる。

このような状況の中で、今年の3月に参加者を募って、白石市の本人の会との交流行事を計画して実施した。

「合同交流会」の案内チラシを作成し、当日は、仙台駅に集合することにした。大多数の会員は、一人で来ることができたが、一部は保護者同伴で集合場所に来ていた。参加者は16名、保護者と支援者が4名で実施した。

今回のイベントで、取り組んでいきたい項目は、以下の内容と考えている。

- 券売機での切符購入体験と改札機を通る
- ホームで案内板などを見て正しく乗車ホームに向かう
- 自分が乗る電車の確認

参加者の確認をして、まずは、白石市までのチケットの購入を各自が行い、ホームに移動して、出発まで待機。一般の乗客もいる中、安全に留意しながら、乗車した。

券売機の操作は、普段はICカードを使用するのでチケットを購入する機会がないので、料金を確認してチケットを手にする際に支援が必要な場面も見られた。

支援者がいないときの対応として、困ったら駅の担当者に尋ねるという対応も経験すると、次からの利用で活かせるのだろうと感じた。

白石市に到着後は、現地の本人会との交流会として、ランチ作り、白石城を見学し、帰路に就いた。

帰りの行程は、行きの時の「振り返り」ということで、できるだけ本人主体に取り組んだ。

移動円滑のための体験と他団体との交流という体験会だったが、仲間とともに移動して無事イベントを終了できたことは、本人たちにとっても移動に対する不安の解消の一助になったものと考えている。感想には、「また参加したい」という声もあり、今後も少しの支援をしながら各種交通機関を利用する事の抵抗感を少しずつ解消していきたいと考えている。